

NGK NTK
 スパークプラグ ニューセラミック
日本特殊陶業
日本特殊陶業株式会社

内燃機関におけるスパークプラグ、世界トップシェアを有する排気酸素センサ、半導体部品におけるパッケージ、機械工具、医療用バイオセラミックス、産業用セラミックスなど幅広いラインアップを製造/販売。

本社：愛知県名古屋市長徳区高辻町14-18
 設立：1936年10月26日
 資本金：47,869百万円
 従業員数：単独：5,823名 連結：13,197名（2015年3月現在）
 URL：http://www.ngkntk.co.jp/

（取材日：2015年6月）

POINT

WebFOCUSとiPadの組み合わせによるソリューションで「いつでも」「どこでも」経営情報を「見える化」

WebFOCUSの開発容易性や柔軟性を活かし、2名の開発者で約4ヵ月間に約50本のレポートを一気に作成

事業部ごとに異なるBIツールをWebFOCUSに統一し、全社の情報活用を活性化させる基盤を構築

WebFOCUSとiPadの活用で 経営情報の「見える化」を実現 BIツールを統合し、情報活用基盤を再構築

事業部ごとに異なるBIツールを使用し、DWHが散在していた日本特殊陶業では、必要なデータの取得やレポート作成に工数がかかり、経営層やユーザが迅速な意思決定をする妨げになっていました。そこで、情報活用基盤の再構築を進め、「いつでも」「どこでも」閲覧ができるようWebFOCUSとiPadを活用して経営情報の「見える化」を実現。今後は、WebFOCUSを全社の情報活用基盤と位置付け、情報分析の更なる活性化を図っていきます。

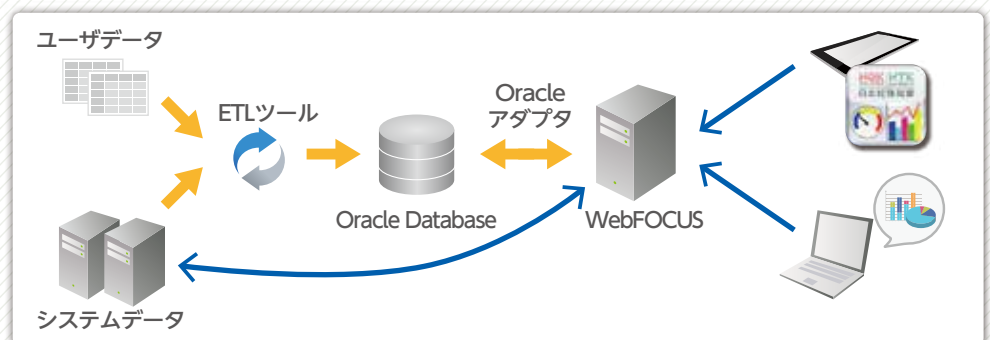
課題
対策
効果

- 事業部、システムごとに異なるBIツールが存在し、DWHが散在していた
- 事業部をまたがるデータを利用するレポート作成に、多くの工数と時間を要していた
- 経営層に向けたタイムリーな情報提供ができていなかった

- 開発容易性、柔軟性、拡張性を備えたWebFOCUSを採用
- iPadの活用で「いつでも」「どこでも」情報確認できる仕組みを構築
- 事業部ごとに異なるBIツールを、WebFOCUSで統一することを目指す

- 経営判断に貢献する情報をタイムリーに提供できる環境を整備
- 多大な時間とコストが必要だったレポート開発の大幅な効率化を実現
- 今後のデータ活用を見据えた、全社の情報活用を支える基盤を整備

業種：製造業
 ユーザー数：約300名
 データソース：Oracle Database
 利用業務：経営ダッシュボード
 物流関係の情報参照
 各部門KPI指標の参照
 生産関係のオンラインレポート

システム概要


WebFOCUS

事業部ごとに異なるBIツールが迅速な意思決定の妨げに

世界No.1のシェアを誇る自動車エンジン部品「スパークプラグ」をはじめ、セラミック関連製品を国内外で製造、販売する日本特殊陶業株式会社。同社では、2011年頃より、経営層の意思決定を支援するため、情報活用基盤の再構築に向けたプロジェクトを始動しました。そのプロジェクトを進める中、課題が浮上してきました。各事業部、システムごとに異なるBIツールを使用しており、DWHが散在し、利用するデータに対する統制が取れていないことが判明したのです。

経営管理本部 情報システム部 業務システム3課主任 立松 博樹氏は、次のように振り返ります。

立松氏 データの取得、レポート作成に工数を要し、それが経営層をはじめとするユーザの迅速な意思決定を妨げる原因となっていました。経営層に向けて、蓄積されたデータの有効な使い方ができていなかったのです。また、それぞれのツールの保守性の低さや、ライセンスコストも課題でした。



立松博樹氏

情報システム部 情報企画課 課長で副参事の潮田 哲也氏も次のように解説します。

潮田氏 情報システム部は経営管理本部に所属し、ITを通じて経営に役立つ情報を提供するのがミッションの1つです。経営判断に必要な数字は刻々と変化します。変化をいち早く捉え、その理由を知るためにもタイムリーな“活きた”データの提供が必須になります。ちょうど同時期にiPadを経営層向けに導入しており、その活用もテーマでした。そこで、データを「迅速」に、「いつでも」「どこでも」見られる環境の整備を目指して、プロジェクトを進めることになりました。



潮田哲也氏

開発容易性、柔軟性、拡張性とアシストの提案姿勢を評価

情報活用基盤の再構築で要となるBIツールの選定にあたって要件としたのは、簡単にレポートを開発できる「開発容易性」、同時に複雑な要件にも対応できる「柔軟性」、そして将来計画へも

対応可能な「拡張性」でした。情報システム部では以前より、BIツールについて情報収集を実施しており、4~5製品を検討する中から最終的に2製品に絞り込み、比較/評価しました。その結果、WebFOCUSの採用を決定しました。

立松氏 WebFOCUSの選定でポイントとなったのは開発容易性と柔軟性が両立していたことです。WebFOCUSは基本的にGUIでレポート開発できる一方、細かなカスタマイズや複雑な要件にはスクリプト言語を使って対応できます。また、各種データベースとのアダプタなどオプション製品も充実しており、拡張性の高さもポイントでした。

潮田氏 アシストの提案力も評価しました。単に、WebFOCUSの機能の活用だけに留まらず、どのように情報活用を展開していくべきか、当社の視点に立って、将来のあるべき姿に向けたソリューションを提案してくれました。

開発標準の策定で、大幅に効率化 「いつでも」「どこでも」 iPadで情報確認

2012年3月にWebFOCUSの採用を決定。翌月より導入作業を進めるとともに、開発するレポートがバラバラにならないよう統一化を図るため、レポートの開発標準書を作成しました。経営情報の「見える化」の第1弾として取り組んだのが経営ダッシュボードの開発でした。この取り組みをスモール・スタートで実現するとともに、レポート閲覧ログを取得/分析してユーザの利用促進ができる環境も準備しました。経営層が利用するデバイスについては、「いつでも」「どこでも」閲覧ができるようにiPadを採用しています。

潮田氏 iPadであれば、社外でも容易に必要なレポートを参照することができます。社内でもiPadは携帯しているので、PCがあるデスクに戻らなくても、Wi-Fi環境を利用して気になった時にいつでもデータを参照できます。例えば、会議中に気になるデータを調べるといった使い方もできるので、迅速で的確な判断にも役立ちます。

WebFOCUS採用の効果の1つがレポート開発の大幅な効率化です。以前は、異なる2つの事業部の業績と生産推移が把握できる資料を作成しようとする、異なるBIツールと分散したDWHからデータを収集してまとめるという大変な作業が必要でした。特に、スクラッチ開発していたBIツールの場合、新たな定型レポートを出力できるようにするには、開発工数もコストも膨大になります。しかも、ツールの開発が属人化され

ていたため、誰もが開発できる状態ではなかったと言えます。情報システム部 業務システム1課の鈴木 鮎美氏は次のように語ります。

鈴木氏 WebFOCUSでのレポート開発は、GUIで行う簡単なものであれば2時間程度、言語を使用する複雑なものでも1人で3日もあれば対応できてしまいます。WebFOCUSによるレポート開発は、2012年7月頃より開発者2名で本格的にスタートし、約4ヵ月間で約50本を一気に作成しました。現在では、開発できるメンバーも10名程度に増えて、これまでに約200本のレポートを作成しています。



鈴木鮎美氏

また、このアプリケーションを利用する営業部門へは、WebFOCUSの導入によって従来システムにて提供出来ていなかった情報を見える化でき、新たな価値を提供することができました。

WebFOCUSを全社の情報活用を支える基盤にする

現在では、物流関係の情報参照、各事業部のKPI指標の参照へと利用を拡大。さらに基幹システムのデータを参照できる仕組みの構築も進めています。ユニークな取り組みの1つが、経営戦略としてトップダウンで進めている女性活躍推進におけるWebFOCUSの活用です。業務システム1課の加藤 真沙代氏は、次のように説明します。

加藤氏 2013年6月に発足した女性活躍推進「DIAMONDプロジェクト」の情報システム部での取り組みとしてWebFOCUSの業務活用を進めています。従来、休暇の取得状況や残業時間の管理レポートは、担当者が手作業で多くの時間と手間を掛けていました。この作業を軽減するため、WebFOCUSレポートを企画/設計/開発まで女性だけで作成しました。今秋よりレポートは全社に展開する予定です。



加藤真沙代氏

既存のBIツールを順次、WebFOCUSへと移行する作業を進めながら、高度な情報分析といったさらなるデータ活用を見据え、今後はWebFOCUSを全社における情報活用を支える情報基盤として位置付けていく方針です。